上町台地界隈の情報紙

うえまち

揮毫 一心寺 長老 高口恭行 師

号外 2021 1

発行：NPO 法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX.06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

二〇二一年 聖徳太子一四〇〇年御聖忌記念

四天王寺 新縁起

第19回

蓮華蔵院と芹田坊

四天王寺 勧学部
文化財係主任・学芸員
一本崇之

四天王寺のような大きな寺院は、「坊」や「院」と呼ばれる小寺院が集まって構成されています。中世における四天王寺の寺院構造についてはほとんど解明されていませんが、四天王寺の中に、蓮華蔵院（れんげぞういん）と芹田坊（せりたぼう）という寺院が存在していたことが断片的な史料から知られます。この二院は『聖徳太子伝』の相伝において重要な役割を果たしていたと考えられています。

栃木・輪王寺に伝わる『太子伝』は、応永12（1405）年に先述した蓮華蔵院内の護摩堂にて書写されたもので（巻七奥書）、この太子伝が「四天王寺芹田坊の秘伝」であり、「院内より出してはならず、起請文をもってただ一人に付属させるべき書である」と記されています（巻八奥書）。さらに、寛正3（1462）年の奥書がある愛知・万徳寺蔵『聖徳太子伝』にも、同じく「この伝は芹田坊の秘伝であり、四天王寺東門村蓮華蔵院護摩堂にて書写した」と記されています。

ここに挙げた諸本は、中世においてかなり広範に流布したとみられ、以後の太子伝の展開に大きな影響を与えました。つまり、こうした太子伝を受け伝えていた蓮華蔵院や芹田坊は、中世を代表する太子伝の発信拠点であったといえるのです。

万徳寺本奥書にある「東門村」は、現在の勝山1丁目付近にあった中世の村で、蓮華蔵院が四天王寺の境外に存在していたことがわかります。また、この蓮華蔵院の本尊であった美しい如意輪観音坐像が奈良国立博物館の所蔵として現存しています。それ以外のことは今のところ謎に包まれたままです。

芹田坊も、一つの厨子に地蔵菩薩と阿弥陀如来が並立する本尊像が四天王寺本坊に伝存しています（写真）。芹田坊は地蔵と阿弥陀を本尊とすることから、「地弥院（じみいん）」とも呼ばれていました。

慶長6（1601）年には四天王寺を構成する衆徒として名を連ねる芹田坊ですが、慶安5（1652）年頃には坊自体は廃されていたようです。一方で、毎年正月4日には、三臈（さんろう。四天王寺の一舎利・二舎利に次ぐ要職）を担う僧侶の坊にて、芹田坊修正会が修されていたことが知られます。つまり、芹田坊自体はすでに存在しないにも関わらず、修正会の法要だけは行われているのです。このことは、四天王寺における芹田坊の重要性を示唆しているように思われます。

ところで、中世の四天王寺において、太子伝や絵伝を製作・相伝していた「絵所（えどころ）」と呼ばれる組織の存在が指摘されています。絵所は聖徳太子絵伝をはじめとする絵画制作に重要な役割を果たしていたとみられ、美術史学を中心に大きな研究課題のひとつになっています。まだ確証はありませんが、太子伝の相伝拠点であった蓮華蔵院や芹田坊と四天王寺絵所が深く関わっているように思われ、この両院の実態究明によって、四天王寺絵所の謎が解き明かされるのでは、と考えています。

厨子入弥陀地蔵尊像

相羽秋夫の

上町らくご植物園

植物が登場する落語を取り上げ、演芸評論家の相羽さんならではの面白い視点で読み解きます。

第20折

上方落語「壁松茸」

秋の王様―松茸

職人が、はらいせに大家（おおや）宅の壁に松茸（まつたけ）の絵を描いて去った。それを見つけた女子衆（おなごし）が消すと、翌日に前より大きな松茸が描いてある。びっくりした女子衆が、また消すと、その翌日には、もっともっと大きい松茸が描いてあった。困り果てて女子衆が、ご寮人（りょん）はんに相談すると、にっこり笑って「やめときなはれ。松茸は、弄（いら。触る）や弄うほど大きいになる」。

秋の味覚の王者松茸。アカマツの根に共生する菌で、決して松の子ではない。だから〝木の子〟と言うと微妙に違うかもしれない。「草片（くさびら）」とする古名の方が実態に近いかも知れない。日本人が好むきのこのビッグ5は、松茸を筆頭に椎（しい）茸・榎（えのき）茸（＝滑茸・滑子）・占地（しめじ）・作り茸（マッシュルーム）だ。だが、諺に「香りは松茸味はしめじ」とあるように、松茸は特段にうまいものではない。

「取敢（とりあ）へず松茸飯を焚くとせん」と虚子が俳句で詠むように、松茸ご飯が一番だろう。焼きや土瓶蒸し、すき焼きに入れるなどの料理法がある。いずれも高級メニューだ。広島や岡山・京都が特産県とあるが、収穫量が需要に追いつかず、韓国や中国・カナダからの輸入に頼っている。その中国産も北朝鮮産との噂がある。

まじめな話はここまで。これからは〝松茸のようなもの〟の、江戸期の川柳創作熱を見てみたい。手始めに「気苦労に食せしむ松茸のようなもの」と、ここまでは納得ずみ。「松茸の食傷をして嫁は吐き」。さらに「朔日丸（ついたちまる・避妊兼堕胎薬）で松茸の毒を消し」と発想を一にする。鎌倉にある臨済宗の寺、東慶寺は駆け込み寺として有名だった。そこで「根のふかい松茸を切る鎌の寺」となる。「赤貝は湯がき松茸酒で蒸し」。料理法だと思っていたら永久に真理にたどりつけない。「椎茸のひま松茸の品定め」「椎茸に松茸うまいだしが出る」の2句の椎茸を、御殿女中に置き替えて味わって欲しい。

―「松茸」と掛けて秋刀魚（さんま）と解く、その心は中には開いたものもある。

NPO法人「まち・すまいづくり」活動報告

住まいと暮らしの無料相談会

2021年2月13日（土）10時～12時

大事なことなのだけど、なかなか日常生活では相談できない住まいと暮らしの「困った！」はありませんか？

住まいと暮らしの無料相談会には当法人会員の弁護士、司法書士、税理士、宅地建物取引士、一級建築士といった専門家が出席。専門知識を生かし、責任を持ってご相談に応じています。

次回は2021年2月13日（土）10時～12時に実施。専門家が公務等で欠席する場合がありますので、なるべく事前にご予約をお願いします。また、実施日以外の日でも対応可能です。ご相談ください。

場所：大阪市立社会福祉センター（大阪市天王寺区東高津12-10）
予約・お問い合わせ：NPO法人「まち・すまいづくり」（06・6779・7222）
その後、3月13日（土）・4月10日（土）・5月8日（土）に実施します。

うえまち寄席

「うえまち」は上方落語発祥の地。米沢彦八が生國魂神社の境内において小屋掛けの辻噺をしたのが始まりといわれています。そんな場所を「誇りに思いたい！」という地元の声を受け、始めたのが、「うえまち寄席」です。年に4回（2月、5月、8月、11月）土曜の午後、桂佐ん吉、桂ちょうばが中心となり行っています。

第33回うえまち寄席
日時：2021年3月6日（土）14時開演（13時半開場）
出演：桂佐ん吉、桂ちょうば
場所：一心寺南会所
料金：2000円（高校生以下半額）
感染症対策のため座席を30席に制限（12月15日現在）。そのため、原則、予約制としています。申し込み方法など詳細はNPO法人「まち・すまいづくり」のHPか、当法人事務所まで（06・6779・722）

上町台地界隈の情報紙

うえまち

揮毫 一心寺 長老 髙口恭行 師

号外 2021 2

発行：NPO 法人 まち・すまいづくり
発行人：竹村伍郎
TEL&FAX.06-6779-7222
http://www.machi-sumai.com/
uemachi@machi-sumai.com
〒543-0043
大阪市天王寺区勝山1-11-29

二〇二二年 聖徳太子一四〇〇年御聖忌記念

四天王寺

新縁起

第20回

細字法華経の発見

四天王寺 勧学部
文化財係主任・学芸員
一本崇之

細字法華経とは、本来7巻や8巻に分けて書写する法華経を、微細な文字によって1巻の経巻にまとめたものです。四天王寺には、聖徳太子ゆかりの細字法華経が伝わっています。これは、太子が前世の南岳大師慧思（えし）であった時に御持していたものを、魂を派遣して取り寄せたという「南岳衡山取経（なんがくこうざんしゅきょう）説話」に由来するもので、『聖徳太子伝暦』では次のように語られています。

太子は小野妹子を中国の南岳衡山に派遣し、慧思がかつて御持していた経を持ち帰るよう命じます。妹子は衡山の老僧より経を受け取って帰朝し、太子に届けました。妹子が持ち帰った経を見た太子は一人読み終わると、涙を流して、その経を火に投じてしまいます。人々は訳がわからず、驚くばかりでした。翌年、太子は斑鳩宮の夢殿にて7日7夜の三昧定（ざんまいじょう。瞑想）に入り、1巻の経を感得します。そして「これは私が前世で衡山に修行していた時に所持していた経である。去年、妹子が持ち帰ったものは、弟子の経である。老僧が間違えて他の経を妹子に持たせてしまったので、私が魂を派遣して取ってきたものである」と師僧の慧慈（えじ）に告げるのでした――。

『伝暦』ではこの経を「夢来之経」と呼んでいます。ところが、太子が薨去して後、丁亥年（627年）10月23日の夜半、「夢来経」は忽然と姿を消し、その後、行方がわからなくなってしまったのです（法隆寺伝来の細字法華経《現・東京国立博物館蔵》は、妹子が将来した「弟子の経」に当たるものといわれています）。

時は下って建保2（1214）年、別当慈円が四天王寺宝蔵の宝物の点検を行った際、失われた「夢来経」が突如発見されます。聖霊院絵堂にて『伝暦』と照らし合わせたところ、そこに記される「夢来経」の特徴とすべて合致したことから、ただちにこの驚くべき発見が天皇に報告されました。天皇は日記（『禁裏御記』）に書き留められ、勅符を付して宝蔵に安置したといいます。以来、四天王寺本は「夢来経」の伝承によって聖徳太子所縁という聖性をまとい、「太子七種の宝物」のひとつとして当寺什物の中でも別格の扱いを受けてきました。この発見の経緯は詳しい記録が残っており、当時の人々にとって「夢来経」の発見がいかに衝撃的な出来事であったかがうかがえます。

重要文化財「細字法華経」（四天王寺蔵）

しかしながら、四天王寺本はその書風などから、現在では11世紀に書写されたものであることがわかっています。ただそうであっても、11世紀の細字法華経が、こうした太子の伝承をまとって今日に伝わることが貴重であり、四天王寺の太子信仰を語るうえで、極めて重要な宝物であることは言うまでもありません。

相羽秋夫の

上町らくご植物園

植物が登場する落語を取り上げ、演芸評論家の相羽さんならではの面白い視点で読み解きます。

第21折

上方落語「昆布巻（こんまき）芝居」

海草御礼―昆布

匂（にお）いに敏感な男がいた。近所の飯の御数（おかず）の匂いを当て、気に入ると貰いに行った。ある日、家主宅で昆布巻（こんまき）を炊いた。さっそく男が来て「くれ」と言うが、家主は鍋の蓋（ふた）を閉じて渡さない。男は、宮本武蔵が異人（仙人）に、剣を鍋の蓋（ふた）で止められた芝居を思い出し、家主をうまく誘って芝居をさせ、見事に蓋を取らせる。家主「昆布巻欲しさに芝居をするとは、ほんにお前は無茶し（武蔵）やな」と言うと、男「あんたも意地ん（異人）きたない」。

昆布はコンブともコブとも発音する。昆布・若布（わかめ）・鹿尾菜（ひじき）・水雲（もずく）〈以上褐藻（かっそう）〉、海苔（のり）・天草（てんぐさ）〈以上紅藻〉、それに緑藻などの海藻と海中の植物全てを含めて海草と言う。だからこの欄で紹介する資格は十分にある。

北海道や東北地方が主な収穫地だが、昆布船を出し、投げ鉤（かぎ）・曳（ひき）鉤・懸（かけ）鉤などの手段で海底から引き上げる。海辺に漂着したものを拾うこともある。それを干し、店頭で売る。この過程を俳句でご案内する。「サロマ湖と海との境昆布舟」「昆布拾ふ乳房は濡れて滴（したた）れり」。そして「海の端踏んでは昆布干してゆく」。「干し昆布布のごとくに折りたたむ」と商品化し、「昆布屋で昆布永く親しく眺められ」となる。

「昆布に針刺す」の言葉がある。何か心に誓うことがあると、昆布に針を刺して心を固くした。また人を呪う時は、それを井戸に沈めたり、昆布で人形を作り樹木に刺す風習があった。

昆布の料理法は多いが、関西では出し汁の主流は昆布だ。関東では鰹（かつお）が中心になる。昆布巻は、大阪ではコンマキと発音し、専門に売る商人がいた。「幸ひと心祝ひに買ひもせん　見のがしならぬ夜の昆布店」の狂歌が残るように、〝夜の昆布〟は〝喜こぶ〟のしゃれで、「夜の昆布は見のがすな」と言われた。

帯を解かずに男と情を交わすことを「昆布巻」と称した。山崎豊子作『ぼんち』に見える。正月の新婚家庭に、今でもありそうだ。

―「昆布」と掛けてマタニティドレスと解く、その心は鰊（にしん＝妊娠）に合う。

大人のための

文章教室⑮

ライター・編集者 松本正行

気になる表現④「読まさせる」

当社の新入社員には、まず先輩のレポートを読まさせます。

前回は「ら抜き言葉」を紹介しました。今回は「さ入れ言葉」です。1996年度の「国語に関する世論調査」において、すでに文化庁が「さ入れ言葉」の調査を行っていますから、そのころには目立ち始めていたとみていいでしょう。

正解はもちろん次のとおり。

◀

当社の新入社員には、まず先輩のレポートを読ませます。

「明日は休ませていただきます」「車に乗させてください」「娘に持って行かさせます」――これらの「さ」はすべて必要なし。「歌わさせていただきます」などはテレビでよく耳にしませんか。「さ」を加えたほうが、なんとなく丁寧に感じるからなんでしょうね。

実は、「さ入れ言葉」ほど広まってはいないものの、「れ足す言葉」もあります。「行ける」「読める」といった具合で、使っているのは主に若者ですが、言葉は耳から入ります。頭に残りいつの間にか使ってしまった、ということがないよう注意したいものです。

上町台地にある高津高校のOB。1000を超える取材経験をもち雑誌、webを中心に活動中。NPO法人「まち・すまいづくり」会員。